

言を採択して以降、「占冠村教育を語る住民会議」が中心となり、ヒロシマ・ナガサキの惨劇を絶対に繰り返さず核も戦争もない平和な社会を願い、村内の中学生を広島県に派遣する「広島平和体験学習事業」を行っています。今回は生徒7人・引率2人が参加しました。ヒロシマの地から学んだことや感じたことを報告していただきます。



第37回 広島平和体験学習

占冠中2年 杉岡 那奈

私は原爆ドームを見て、とにかく壮大だと感じました。原爆ドームは爆心地である島病院からわずか160メートル離れていました。しかし、鉄骨が見え、壁が剥がれ落ちているようだと感じました。周囲の姿は、原爆の威力や原爆ドームの力強さ等を表してあります。その場所は、どこかそのドームの周りだけは別の世界にいるような感覚でした。その後の広島平和記念資料館では、展示してあった爆心地付近の銀行の壁が強く印象に残っています。その壁は原爆の熱線により白く変色していましたが、人が座っていた一部分のみ黒く残っていました。原爆の威力、恐ろしさの伝わる展示でしたが、解説ではこの人の努力を、私たちもしっかりと受け継ぐことができたと思います。これからは、学んだことをさまざまなお方にしっかりと伝えていこうと思いました。最後に、このような貴重な機会を与えていただき、ありがとうございました。

今日は前にあるこの場所で、8月6日に人が1人一瞬にして亡くなってしまった、といふ普段ならば決して経験できない状況に、どつと心拍数が上がり、言い表せない緊張感と恐怖心に襲われました。その後、私たちは被爆者である脇舛友子さんのお話を伺いました。友子さんは3歳の頃に被爆し、そこから現在までの体験などをお話ししてくださいました。8月6日当日のお話も聞きましたが、私が最も驚いたのはその後の生活のことでした。強い放射能による後遺症や白血病と闘いながら生活していた友子さんは、就職の面接で「あなたは被爆していますか?」と聞かれたそうです。このことには強い衝撃を受けたと同時に被爆していましたと聞かれたので、たとえ後遺症が少なくても「普通の生活」をすることがこんなにも難しくなるのか、と思ひ、胸が痛んだことを覚えています。

●1日目 私は、広島平和記念資料館へ行きました。そこには、被爆後の写真や物などが多い展示されていました。私は、なかなか前の時代のことなども残すとされる人々の姿や、被爆した建物を一部で見学しました。袋町小学校でも、当時使用された伝言板や校舎自体を後世へ残そうとする人々の意志と努力を感じました。私は、今回の平和体験学習を通して、原爆の悲惨さ、被爆者の苦悩、この出来事を残す。私が聞いて驚いたことは、友子さんは当時3歳で、私は3歳の頃の記憶などないのに覚えていたことです。それだけ悲惨な現場だったのかと思い浮かべると、原爆がいかに恐ろしいか再度確認できました。このような話を聞くのがたみを確認できました。現在被爆者の高齢化が進む中、話を聞ける時代に生まれたこと、そして、このような機会を与えてくれたことに感謝します。

●2日目 平和の学び2日目は、被爆建物巡りで実際に被爆した建物を見て回りました。その中でも心に残ったことは、当時避難所になっていた袋町小学校というところでは、小学校の黒板に、たくさんの人の名前と探していますなどのメッセージが残されており、私は、みんなで一生懸命家族などを探しているという状況を考えるだけでも切なくなりました。次に行つた本川小学校平和資料館では、家具などの物が溶けたり変形したりしてしまったことは、当たり前の生活像できないと感じました。最後に、平和の学びを通して感じたことは、当たり前の生活が一瞬で壊れてしまう、といふ怖さと本当に原爆、戦争はあってはいけないことなんだと改めて実感しました。さらに生きられるということがどれだけ幸せなのかについても考えることができました。



に負けずに残った建物はやはり鉄筋コンクリート製の工場や銀行ばかりでした。しかし、そのような残った建物の持ち主たちは、原爆が投下された日の翌日から無料でビルを配るなど、被害に遭った人々のために働いていたそうです。その全員が協力する姿勢や、被爆した建物を一部でも残すと考えた人々に強く心を打られました。また、その後見学した袋町小学校や本川小学校でも、当時使用された伝言板や校舎自体を後世へ残すとする人々の意志と努力を感じました。私は、今回の平和体験学習を通して、原爆の悲惨さ、被爆者の苦悩、この出来事を残す。

●1日目 占冠中2年 鈴木 楊生
し伝えようとする広島の人々の思いなどさまざまなことを学ぶことができました。特に強く感じた、原爆の現実を後世へ残し伝えようという人々の努力を、私たちもしっかりと受け継ぐことができたと思いました。これからは、学んだことをさまざまなお方にしっかりと伝えていこうと思いました。最後に、このような貴重な機会を与えていただき、ありがとうございました。

●2日目 占冠中2年 鈴木 楊生
す。私が聞いて驚いたことは、友子さんは当時3歳で、私は3歳の頃の記憶などないのに覚えていたことです。それだけ悲惨な現場だったのかと思い浮かべると、原爆がいかに恐ろしいか再度確認できました。このような話を聞くのがたみを確認できました。現在被爆者の高齢化が進む中、話を聞ける時代に生まれたこと、そして、このような機会を与えてくれたことに感謝します。

●1日目 占冠中2年 鈴木 楊生
まず私は、広島平和記念資料館へ行きました。そこには、被爆後の写真や物などが多数展示されていました。私は、なかなか前の時代のことなども残すとされる人々の姿や、被爆した建物を一部で見学しました。袋町小学校でも、当時使用された伝言板や校舎自体を後世へ残すとする人々の意志と努力を感じました。私は、今回の平和体験学習を通して、原爆の悲惨さ、被爆者の苦悩、この出来事を残す。私が聞いて驚いたことは、友子さんは当時3歳で、私は3歳の頃の記憶などないのに覚えていたことです。それだけ悲惨な現場だったのかと思い浮かべると、原爆がいかに恐ろしいか再度確認できました。このような話を聞くのがたみを確認できました。現在被爆者の高齢化が進む中、話を聞ける時代に生まれたこと、そして、このような機会を与えてくれたことに感謝します。

●1日目 占冠中2年 中本 帆香
私は、初めて原爆ドームを見た。今、核爆弾をなくしようと取り組んでいるのは日本だけです。ですが、この悲惨な出来事を伝えていけば、核を持つ国が少なくなるかもしれません。私は、広島平和記念資料館に行き、被爆者の実態を知ることができました。その中でも私の心に残っているのは、被爆した人の体のことです。被爆した人がどんなに残酷な形に変わってしまうんだという恐怖を感じました。次に広島平和記念資料館に行き、被爆者の実態を知ることができました。その中でも私の心に残っているのは、被爆した人の体のことです。被爆した人がどんなに残酷な形に変わってしまうほどの大やけどになってしまふほどの大やけどになりました。次に、被爆者の実際の写真やイラスト、被爆者の文などで表されているのがとても悲惨で現実に起つたことだと私は思いました。さらに、被爆生き残れたはいいものの、お金がなくて生きられないが生き残れたはなかつたという言葉がとても心に響きました。次に被爆体験講話では、当時3歳だったという方にお話を聞きました。その方は、お母さんと一緒に歩いている時に自分に向かってくる人たちにお化けが

●2日目 平和の学び2日目は、被爆建物巡りで実際に被爆した建物を見て回りました。その中でも心に残ったことは、当時避難所になっていた袋町小学校というところでは、小学校の黒板に、たくさんの人の名前と探していますなどのメッセージが残されており、私は、みんなで一生懸命家族などを探しているという状況を考えるだけでも切なくなりました。次に行つた本川小学校平和資料館では、家具などの物が溶けたり変形したりしてしまったことは、当たり前の生活像できないと感じました。最後に、平和の学びを通して感じたことは、当たり前の生活が一瞬で壊れてしまう、といふ怖さと本当に原爆、戦争はあってはいけないことなんだと改めて実感しました。さらに生きられるということがどれだけ幸せなのかについても考えることができました。

占冠中2年 八木 瑞音

まず1日目は、初めに原爆ドームを見学しました。自分は被爆した建物を見るのは初めてでやはり实物を見ると原爆の恐ろしさ改めて感じました。次は広島平和記念資料館に行き、被爆時に残った衣服などを見ました。そこには実際に被爆者が書いた被爆時の状況を表す文章などがあり、そこで被爆者の当時の心境などを見ました。そして最後に被爆者である脇舛友子さんは当時3歳で被爆し、その時の状況を今でも忘れられないとおっしゃっていました。私はもう3歳の頃のことなど覚えておらず、それほどの衝撃的な出来事だったことが分かりました。まず、1日目では被爆者の実体験や被爆者が被爆時に着ていた服などを見て原爆の恐ろしさを改めて感じ、原爆の被害の大きさや人々に与えた影響を学びました。

當業していることは珍しいそうです。見た目だけでは被爆したとは思えないほどにきれいな外観で広島の人たちの復興に対する強い思いを感じました。次に袋町小学校平和資料館に行き、当時の人たちが黒板に生存確認を行ったとみられるものを見て、やはり当時は携帯電話もなかったため現在よりも生存確認が難しく大変なものだったのだと感じました。最後に本川小学校平和資料館に行き被爆時に出了建物の窓が熱せられて変形したものなどを見ました。人間の体より硬い物が変形するということは人間もとても苦しい思いをしたと思います。今回の平和体験学習で原爆の恐ろしさや人々に与えた影響などを学べて、とてもいい経験になりました。この平和体験学習で学んだことを忘れずにこれから後世に伝えていきたいと思います。

争いがどれだけ残酷なことかを聞かせていただきました。そして、私たちは被爆体験講話を実際に被爆を体験した方のお話です。発せられる言葉、単語の一つ一つにすごく感情が込もっていて、原爆によつて何が起つたのかをより鮮明に認識しました。この体験を通して、戦争は絶対に繰り返してはいけない悲しい歴史であること、戦争をすれば数えきれないほどの平和な日常、まぶしい命を失つてしまふこと、そして、争うことがどれだけ恐ろしいことかを実感することができました。

てはいけません。繰り返さないためにも、我々人類は手を持つなぎ、互いを尊重し、愛を持つてコミュニケーションを取り必要があると感じました。今回の学習では、本当に貴重な体験をさせていただきて、広島平和体験学習に協力していただいた皆さんへの感謝でいっぱいです。今回学んだことを心に留め、平和は大切だという意識を持つて生きていきたいと思います。

差別を何十年も絶え間なく与え続けました。

講師の脇舛さんは3歳の時、母の実家がある安芸高田市から呉市の自宅へ汽車で戻る途中、原爆の投下によつて汽車が止まつたため、被災してた広島市内を通つて10キロ(タケル)とされた呉線が運行している駅に向かつて母に背負われて移動している時に被爆し、17歳になるまで得体の知れぬ体調不良、被爆者であることへの角い目や差別と鬪つていました。それでも、高校を卒業する日の朝、この日を生きて迎えられたことに大きな喜びを感じ、ここまで支えてくれた両親に感謝したことでの今でもその時の喜びと感謝の気持ちを胸に朝の散歩を続いているそうです。

7月27日木曜日、この日は広島市内にある現存する被爆建物巡りをしました。被爆建物だけでなく、その後、広島の平和と復興を願い、尽力した方々のモニュメントも見ることができ、広島が発信し続けている平和に対する思いをより深く学ぶことができました。その中でも、NHK広島放送局の横に設置された「ヒロシマの火 平和への灯」をそばで見て、説明を受けた時

● 1日目 占冠中2年 八木 瑛音

まず1日目は、初めに原爆ドームを見学しました。自分は被爆した建物を見るのは初めてでやはり实物を見ると原爆の恐ろしさ改めて感じました。次は広島平和記念資料館に行き、被爆時に残った衣服などを見ました。そこには実際に被爆者が書いた被爆時の状況を表す文章などがあり、そこで被爆者の当時の心境などを見ました。そして最後に被爆者である脇舛友子さんからお話を聞きました。脇舛さんは当時3歳で被爆し、その時の状況を今でも忘れられないとおっしゃっていました。私はもう3歳の頃のことなど覚えておらず、それほどの衝撃的な出来事だったことが分かりました。まず、1日目では被爆者の実体験や被爆者が被爆時に着ていた服などを見て原爆の恐ろしさを改めて感じ、原爆の被害の大きさや人々に与えた影響を学びました。

営業していることは珍しいそうです。見た目だけでは被爆したとは思えないほどにきれいな外観で広島の人たちの復興に対する強い思いを感じました。次に袋町小学校平和資料館に行き、当時の人たちが黒板に生存確認を行ったとみられるものを見て、やはり当時は携帯電話もなかつたため現在よりも生存確認が難しくなりました。最後に本川小学校平和資料館に行き被爆時に出了建物の窓が熱せられて変形しました。人間の体より硬い物が変形するといふことは人間もとても苦しい思いをしたと思います。今回の平和体験学習で原爆の恐ろしさや人々に与えた影響などを学べて、とてもいい経験になりました。この平和体験学習で学んだことを忘れずにこれから後世に伝えていきたいと思います。

た。特に心に残っていることは二つあります。一つ目は、被爆により、全身にやけどを負った子どもの写真です。この写真を見た時は被爆の恐ろしさや一日一日の大切さを感じました。二つ目は、放射線によって死の斑点が出た兵士の写真です。この写真を見た時は気を失うほど衝撃を受けました。放射線は、浴びた人たちの生活を狂わすほど悲惨なものだと知り、二度と同じ過ちを繰り返してはいけないと思いました。次は、被爆体験講話を聞きました。講話をしてくれた脇舛友子さんは、被爆で体験したことやその後の出来事を話してくれました。一番驚いた話は、子どもが小石を食べながら餓死していたことです。食料に困らないう今を大事にしていきたいと思いました。

まだどこかの壁に言葉が書かれ残されていたら見つけたいと思いました。次は、本川小学校平和資料館に行きました。心に残った写真は、原子爆弾が投下される前と投下された後の広島の様子です。原子爆弾の怖さが非常に伝わる写真だと思います。戦争をしてはならないことや一日一日の大切さ、親や友達などのいろんな人に感謝を伝える大きさ、英語の大切さを学ぶことができました。この広島平和体験学習で学んだことをたくさんの人伝え、戦争のない日々を過ごせるよう頑張っていきたいです。

A group of students, including a boy in a blue shirt with 'STUSSY' and a girl in a white t-shirt with 'BOOKSMITH', are sitting on a brick walkway. They are all wearing face masks. In the background, there are other people standing and some green plants in flower boxes.



この広島平和体験学習と31日に行われた反核平和の火リレーとのつながりを感じられ、生徒たちがさらに今回の学びに深みを増せる良い機会を得ることができたと思いました。

「当時、福岡から兵役で広島に就いていた男性が原爆投下直後、書店を営む叔父の消息を求めて広島市に入り、焼け野原となつたその場の残り火をカイロに採取し、彼の故郷（福岡県八女市星野村）で保存し、星野村ではその後、「平和の塔」が建てられてこれに炎は伝承されました。そして、このNHK広島放送局の横に設置されている『平和への灯』モニュメントの火と炎は伝承されました。そして、このNHK広島放送局の横に設置されている『平和への灯』モニュメントの火と

に至る」とのことでした。そのお話を聞いて、反核平和の火リレーの火は1945年8月6日のあの日から続く恒久の平和への思いの象徴であることを実感し、これからも平和を大切にする占冠村の活動が絶えることなく続いてほしいと願う1日でした。